
 <書 評>

日大講師 高橋政祺著

病 院 管 理 学 入 門

病院管理研究所医療管理部長 岩 佐 潔

病院管理学の全般をとり扱った図書としては、島内武文氏の「病院管理学」が昭和32年に出版され、つづいて昭和33年には今村栄一氏の「病院管理学の実際」が刊行されている。しかしこれらは病院管理者または管理グループに属する人々を読者対象として書かれたものと思われる。島内氏の著書は初版が760頁を越える大きなものであったが、最近出された改訂版はさらに大部のものとなっている。

それにひきかえこの高橋政祺著の「病院管理学入門」はA5判150頁のごく読みやすい病院管理学の概説書である点が大きな特徴である。そしてこの本が管理者むきの専門書ではなく、一般の病院勤務者に新しい病院を理解してもらうことを目的として書かれたものである点にこの本の使命がある。

このような著書の必要性について、著者自身がその序文の中で面白い表現を使っているのをそれを引用すると「柔道に受身というのがある。投げに法があればそれを受ける

にも理法がある。柔道修業の第一歩は受身の修得からはじめなければならない。それと同じように近代病院の勤務者は新しい病院を理解しなくてはならない」

私も高橋氏のこの意見に全く同感するものである。したがってこの本は病院に勤務している多くの人々およびこれから病院に勤務しようとしている多くの人々に読んでほしい本である。もちろん病院管理者も読んでほしいが、病院管理者は病院の従業員とくに新採用者にこの本をすすめて欲しいと思う。

病院管理学は雑多な内容を含むものである。本書では病院の理念、病院の倫理からはじめて、管理論、組織論、人間関係をのべ、病院各部の業務に論及し、さらに業務の合理化の技法を解説し、病院の財務と採算性におよんでいる。そして最後に、院内感染管理と医療評価の問題をとり扱い、複雑な病院管理の内容を要領よく解説している。しかし入門書はやさしいようで書くのが大変むずかしいとは古くからいわれているこ

とである。この本も、もちろん入門書として完全なものとはいえないであろう。私自身もいくぶん著者と意見を異にすると考えられる箇所もないわけではない。また「業務の合理化」の節における管理技法の説明もある意味ではむずかし過ぎるし、ある意味ではもの足りないように思われる。

ともあれこのような病院管理学の入門書が作られたことは、わが国の病院管理を向上させる上に大いに役立つものと思われる。特に著者が日ごろ特別の関心を持っている病歴管理、医療評価および院内感染管理の部分は大変興味深い。そのほかにもいろいろ貴重な記述が散見されるので、私は重ねて病院に勤務する多くの人々にこの本をすすめたい。そしてさらに詳しく知りたいことについては巻末の文献やその他の文献についてより深く問題の追求に立ち向かう人が1人でも多く出現することを望んでやまない。

A5判 頁160 図15 写真4 ¥980
〒80

 医学書院刊
